

Changes in maternal consciousness after childbirth and related paternal and family support

宮中, 文子

<https://doi.org/10.15017/458567>

出版情報 : 九州芸術工科大学, 2003, 博士 (芸術工学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

第1章 研究目的

第1節 研究目的

出産とその後続く子育て期において、健やかな「母親への発達」はどのような過程として認識されるのか、それに父親や家族がそのように影響するのかを明らかにすることが必要である。「母親への発達」とは、母親意識が肯定的に変化することと定義した上で、第Ⅱ部では、横断調査による分析を行い、母親意識が高いことには、母親自身の非抑鬱が高いこと、自己価値観が高いこと、夫婦関係の親密度が高いこと、性別役割分業観が伝統的であること、また、その夫の父親意識が高いことなどが関連することを明らかにした。

本第Ⅲ部では、出産後1か月、10か月および18か月の3期を縦断的に調査することによって、初産婦と経産婦で、母親意識がどのように変化するのか、またその3期において、母親自身の要因および夫（父親）側の要因がどのように影響するのかについて、検討することとした。

第2章 対象と調査方法

第1節 対象と調査方法

第1項 調査時期

本調査は、1996年10月～1997年3月までに京都府内で出産した母親とその夫（父親）のうち、出産後1か月、10か月および18か月の計3回の継続した調査から構成されている。この18か月までの3つの時期（3期）で調査したのは、乳児健診が行われる時期であることや、母親役割は出産後半年から1年までの間に獲得されること（Rubin, 1984）などから、乳幼児の成長・発達や子育てにおける節目にあたりと考えたからである。

第2項 対象ペア

縦断的調査に同意し協力が得られた父母で、第Ⅱ部の分析対象となった425組の父母ペアに対して出産後18か月（1998年4月～1999年9月）に郵送に

よって質問紙調査を母親に送付し、父親には母親から手渡してもらうよう依頼し、ただし回答した質問紙は夫婦別々に郵送してもらった。この18か月の回収数は母親が356名（回収率61.2%）および父親が348組（59.8%）であった。記入が不十分なものを除去し、かつ母親と父親の回答が揃ったデータ数は、323組となった。したがって、本Ⅲ部における分析対象者は、出産後1か月、10か月および18か月とも、323組の母親と父親のペアである。

その対象ペアの年齢を、表Ⅲ-1に示した。その対象者の調査開始年（1996）の年齢範囲は、母親が17～44歳、父親が17～50歳であった。また、初産婦186人（57.6%）、経産婦137人（42.4%）の平均年齢（標準偏差）は、初産婦28.1（4.0）歳と、経産婦31.4（3.5）歳であった。これは調査年（1996）における全国の初産婦の出産年齢が27.6歳、第2子の出産年齢29.9歳および第3子の出産年齢32.0歳であることと比べ統計学的有意差は認められなかった。また、初産婦群の夫の平均年齢は30.6（4.8）歳、経産婦の夫の平均年齢は33.9（5.3）歳であり、全国平均の結婚年齢では夫と妻の年齢差が2.4歳であることからみても統計学的有意差は認められなかった（日本子ども家庭総合研究所,1998）。対象者のその他の属性を表Ⅲ-2に示した。就業している者の割合は、全体で約27%、家族構成については、核家族が約78%、3世代家族が残りの約22%であった。出産後に里帰りした者の割合は約55%、また児の性別では男児が48%、女児が52%であった。これら就業者の割合、家族構成、里帰りの有無、児の性別には、いずれも初・経産間に有意な差が認められなかった。なお、子どもの出生体重は2284～3992g、平均3079g（SD=342.3g）であった。

表Ⅲ-1 母親と父親の年齢別人数 N=323

		初産婦	経産婦	計
母親	17～24歳	35	4	39
	25～29歳	81	31	112
	30～34歳	59	79	138
	35～44歳	11	23	34
	平均年齢(標準偏差)	28.1(4.0)	31.4(3.5)	29.5(4.1)
父親	17～24歳	13	3	16
	25～29歳	67	19	86
	30～34歳	75	52	127
	35～50歳	31	63	94
	平均年齢(標準偏差)	30.6(4.8)	33.9(5.3)	32.0(5.3)

表Ⅲ-2 母親の属性 %

		N=323			
		初産婦	経産婦	計	初・経産婦間の差 χ^2 検定
就労者率		27.4	26.3	26.9	N.S.
家族構成	核家族	81.7	73.7	78.3	N.S.
	3世代家族	18.3	26.3	21.7	
里帰り	した	59.1	49.6	55.1	N.S.
	しない	40.9	50.4	44.9	
児性別	男児	51.1	43.8	48.0	N.S.
	女児	48.9	56.2	52.0	
出生順位	第1子	100.0		55.4	$\chi^2 = 43.91$ $p < 0.0001$
	第2子		76.0	32.5	
	第3子		18.2	9.3	
	第4、5子		5.8	2.8	

第2節 質問項目

15項目の「母親意識」(7つの肯定的質問項目と8つの否定的質問項目)、母親意識に影響する母親側の4つの関連要因(非抑鬱、自己価値観、性別役割分業観、夫婦関係)および父親側の4つの関連要因(「父親意識」、父親の育児、家事、妻への精神的支援)などは、すべて第Ⅱ部と同様の質問紙調査を用いておこなった。ただし、母親意識または父親意識の質問項目のうち、「良い母親(または父親)」、「叱ると手をあげる」、「子育てが負担」の3項目については、産後1か月にあっては対象者に提示しなかったため、それらの合計点を算出する際にはこの3項目を除いた項目で算出した。

なお、15項目の母親意識尺度の構成における整合性および信頼性を検討するために、323組の父母データから、Cronbachの α 係数を求めた。肯定的質問は $\alpha = 0.80$ 、8項目の否定的質問項目では $\alpha = 0.87$ 、および全15項目では $\alpha = 0.64$ 、と適度な信頼係数が得られた。

第3節 分析方法

母親に関する母親意識、非抑鬱感、自己価値観、夫婦関係、性別役割分業観および父親に関連する父親意識、父親の家事・育児・妻への精神的支援をそれぞれ構成する項目について、出産後1か月、10か月および18か月(以下出産後3

期とする)の回答を初・経産婦別に比較し、3期における回答の変化については、 χ^2 検定を行った。各質問項目の得点化および合計得点の算出は、第Ⅱ部で述べた方法と同様に実施した。

母親意識の合計得点、母親意識に影響する母親側の各要因項目および、父親側の要因項目の合計得点については、初産婦・経産婦と3期(出産後1か月、10か月、18か月)を要因とする二元配置分散分析(two-way ANOVA)を行った。また、事後検定として、Student-Newman-Keuls法によって、post hocテストを行い、有意水準を危険率5%とした。また、出産後3期における母親意識の合計得点を目的変数に、母親意識に影響する要因毎の合計得点、父親意識の合計得点および父親の支援行動毎の合計得点をそれぞれ説明変数とする重回帰分析を行った。

第3章 結果

第1節 母親意識の出産後3期における変化

第1項 母親意識に関する肯定的質問項目の出産後3期における変化

母親意識に関する肯定的質問項目(7項目)に「とてもそう」、および「ややそう」と回答した者の割合を、出産後の時期別と初・経産婦別に示したのが表Ⅲ-3および図Ⅲ-1である。

出産後3期における変化をみると、「子どもは私をじっとみてくれる」、「子育てをしている今は幸せ」、「子どもと遊ぶのは楽しい」、「子育てを自分でやれる自信がついた」の4項目については、初産婦、経産婦および両群を合わせた全体で「子どもと一緒にいるのは嬉しい」については、初産婦と全体で出産後3期に有意な差がみられた。しかし、「子どもはかわいい」と「子どもにとって良い母親だと思う」の2項目については、3期に有意な差が認められなかった。

その回答の全体の割合についての変化をみると、「子どもは私をじっとみてくれる」に「とてもそう」と回答した者は、産後1か月(81.1%)と10か月(85.4%)で多いのに対して、産後18か月(14.6%)で減少し、初産婦および経産